

仕組まれた 中国との 対立

日本人の83%が
中国を嫌いになる理由

和 中 清

はじめに

2015年5月14日、安保関連法案閣議決定の記者会見で、安倍首相は「中国の台頭で流れが変わった。自衛隊の活動を広げ、米軍の関与を維持しないと日本は生きていけない」と述べた。

「南沙の埋立て」で「尖閣の脅威」を想起させ、尖閣を失くせば、次は沖縄となり、「だから（集団的自衛権は）必要でしょ。脅威に備えなくてもいいのですか」という論理に導かれ、安保法制改革は進んだ。「安全保障を取り巻く環境が変わった」と言うが、変わっていない。中国に対立を仕掛け、変わったように見せかけた。「脅威に備えるため」という言葉を国民に語るために対立が仕掛けられた。

対立のストーリーは第一次安倍政権の反省から始まる。自民党が政権に戻り、再度、首相として登場するには何が必要か考えた。「民主党潰し」「沖縄基地」「米軍負担の軽減」「集団的自衛権」「憲法改正」、これらの共通テーマは国民の「不安」である。かくして中国の脅威が仕掛けられ、四つの火種が対立に使われた。「尖閣」「南沙」「歴史認識」「靖国」である。

尖閣は嘘で固めた。右派が対立を裏で仕掛けた。「尖閣について中国と話し合わねばならない」との歴代政治家の共通認識を無視し、「知らぬ、存ぜぬ」で、中国が怒るように仕向

けられた。尖閣は「領土」以前に「人の道」が問われる問題である。

南沙は米国が火をつけた。それに首相は相乗りし「中国脅威」に利用した。日米共同の「南沙の脅威」の仕掛けである。中国は「南海各国行為宣言」で南沙での動きを自重した。米国は中国に「早く南沙で動きなさい」と多くの仕掛けをした。南沙問題では、ある重要事実が隠されたままである。事実を隠し、脅威は煽られた。中国の埋立て写真の提供者は米情報機関でもある。南沙と尖閣の不安から「沖縄も危ない」との脅威がつけられ、「脅威に備えなくてもいいのですか」という方向に導かれた。

歴史認識は、この本が書店店頭に並ぶ頃、70年談話が出る。その談話では「侵略」「謝罪」という言葉が消える可能性がある。もし消えていけば、中国は硬化する。中国は首脳会談を断る。中国で反日デモが起きるかもしれない。そうなればさらに対立が進む。だがそれは、想定内である。安保法制は国民理解が得られていない。対立で「しかたがない」という理解が進み、内閣支持率も回復する。

対立づくりのためにメディア対策が進んだ。一部テレビ局のニュースの取り上げ方が変わった。「沖縄の新聞を潰せ」という発言は首相の思いを代弁したのだろう。

沖縄で中国工作機関が「沖縄独立運動」を進めているという茶番の反中活動がくり広げられた。反中デモや反中講演活動をYouTubeやアーカイブ放送で流す衛星放送会社が

ある。その番組に安倍首相が出演した。テーマは「これからの日本のマスメディアの問題」である。その会社のHPでは「朝日廃刊、街宣チラシ活動」のイベント紹介、番組には「中国の日本間接侵略の現実」などの反中テーマのものも多い。

中国との対立を仕掛ける「三つの対立因子」がある。その一つの右派メディアや反中知識人が「対立を望む政治家」の支援勢力となり、書店の店頭には反中、嫌中本が溢れた。「格差」「バブル崩壊」「覇権主義」「影の銀行」「失業」「中国リスク」のデマ情報も溢れた。

それらの問題、誤り、正しい読み方も本書で詳しく述べた。

筆者が中国に関する最初の本『中国市場の読み方』を書き、15年が過ぎた。当時は多くの人が「市場の中国」を小馬鹿にした。反中知識人が中国崩壊を煽り、中国で車の市場は考えられない、ビールならわかると嘲笑的に話す人もいた。そんな言論に挑み「市場の中国」を書いた。筆者は1991年よりビジネスで中国と関わり、毎月、日本と中国を往復し、現地事情に触れるため中国国内を飛び回った。そして終始、思いつづけたのが日本の中国情報の問題である。自分の目であらえた中国情報をその後の著作『中国が日本を救う』や国立研究開発法人科学技術振興機構「中国総合研究交流センター」のHPの『和中清の日中論壇』で紹介した。筆者には「中国に味方する」意図はまったくない。しかし、日本で流通する情報があまりに多く間違っていることや偏っていること、またその分析が稚拙であるため、こう

して書きつづけている。

当初、日本で流れる間違った中国情報は誤解から生まれると考えていた。しかし今は、それが意図的なものであることがわかる。内閣府の調査では中国を心よく思わない人が83%である。対立因子の仕掛けとデマ情報の結果である。その「総仕上げ」で登場したのが安倍首相の「中国の脅威に備えなくてもいいのですか」という言葉である。その言葉を聞き、筆者はなるほどすべてはこのためだったのかと思った。「南沙は隠し」「尖閣は嘘をつき」「歴史認識と靖国で煽る」。

その結果が「中国の脅威」である。これだけ総力を結集し対立を仕掛け、安保法制を通したのである。必ずそれは使われる。

政治の責務は対話を進め、戦争にならない関係を築くことだが、安倍首相は逆に走った。「積極的平和主義」は戦争を知らない子どもたちの言葉の遊びでもある。

「自尊自衛の戦い」と「集団的自衛権」「東洋平和の確立」と「積極的平和主義」が双子の兄弟になる日が来ないことを祈る次第である。本書を通じて等身大の中国を知る人が一人でも多く現れることを望んでいます。

和清

2015年7月

はじめに

第 1 章

反中・嫌中
の世論

中国を良く思わない日本人は、ほんとうに83%もいるの？
2010年までは、友好が進んでいたのではなかったのか？

18 12

第 2 章

仕組まれた
尖閣の対立

対立を仕掛けたのは誰なのか？
外交遺産が引き継がれなかった理由

31 26

第5章

南京事件と
慰安婦問題

南京事件とはどんな事件だったのか？	80
虐殺が30万人でなく、3万人なら許されるのか？	84
美しい国、品格ある国とは、どんな国？	89
従軍慰安婦と軍の関係	92

第4章

戦後70年談話
と歴史認識

日中戦争は侵略戦争ではなかったのか？	58
南京、重慶爆撃も東亜解放のためだったのか？	66
中国帰還者が戦後、語りつづけたこと	69
どうして反省と謝罪を続けることが自虐史観になるのか？	75

第3章

日中対立を
仕掛ける
三つの因子

対立を仕組む三つの影	36
日中戦争を侵略戦争とするのは汚辱か？	39
安倍首相の中国への対応はどのように変わったのか？	44
沖縄も盗られるって、ほんとうなの？	47
米国が日中対立で担う役割	52

第6章

靖国を 考える

日本には、死者を神として祀る文化、伝統はあるのか？
人が神様を哀悼する、なんだか変では？

101 98

第7章

尖閣の 領土問題を 考える

尖閣という小さな島で日本と中国が対立する理由
棚上げの合意はほんとうになかったのか？
尖閣問題には、もっと本質的なことがあるのでは？

118 111 106

第8章

日本に溢れる 嘘と誤解の 中国情報

どうして書店には、反中、嫌中本が溢れているのか？
歪んで伝わる中国情報
いつまでも中国政治を権力闘争と独裁で読むのは間違ではないか？
腐敗退治と権力闘争は別もの
「中国政府は重要な情報を隠している」は、ほんとうなのか？
「帰るに帰れない中国ビジネス」と囁かれる裏にあるもの

152 144 139 133 128 126

第10章

中国は
とんでもない
格差社会の嘘

13億人の格差のない社会は考えられるか？
すごい格差と言われる中国農村は、どれくらい貧しいのか？
「爆買い」が話題、中国はそんなにお金持ちが多いのか？
中国批判で覆い隠された足元の火

192 188 184 180

第9章

誰が中国を
覇権国家に
仕立てたのか

中国の覇権主義は誰が言い出したのか？
どうして南沙諸島では中国の埋立て写真だけが報道されるのか？
米国が遠く離れた南沙諸島に関わりを持つ理由
南沙諸島の緊張は米国が仕掛けている!?

176 171 168 162

第11章

対立因子に 煽られる 中国リスク

おわりに

参考文献

-
- 叫ばれつづける中国バブル崩壊、いつになったら崩壊するのか？
中国バブルと日本バブルの違い
204 199
- どうして住宅バブルが崩壊しないのか？
あれほど騒がれた影の銀行は、ほんとうに中国リスクだったの？
206 211
- 中国リスクへの誘導に使われた影の銀行
中国の地方政府の債務問題
213 216
- 中国の国家リスクを考える
220